甲第五拾号

共九八

共十五

ル 4
11
15

き

一 桜ハちらぬ頼や青葛
上のおうき之

此夜乃明月嵐入菖蒲

いハ七ツるてしるや
も菖

そハかりしをいろにこそ生まるすて置し
惟よし
逢嵩宗久し

二十九 三十

大尾

門 ル824
號 11
巻 15
東京學校圖書

急速而之巻 雲色之上三序

日本ハ東西広く北陸の長崎の山々まで
たゞ海長く出て河沢多けれハ水陸の産ゆたかにし
かゝる又ことに国に生之れ製作の佳品多かりハ
いよいよ へその手形なくし右にも出る百物の集ま
るなり天府の国に平京あつて四隣の濟とは
ま福く経歴して嗜好の物をもうつとると
るなり國にまことの平京のかぎより
よりくるに名をわかれしもまた是れハことくハの
物の名をしるべし祥し雑し是其大略を称せの
これ廣物の名目を形状をゑかし大和本草を

多く新しけれハ写しにまからし侍る也

宝永六年丑九月　八十翁貝原篤信書

筑前土産之書上三十九目録

器用類　衣服 染織附

刀　鎧鎗　箭鏃　鍔　鳥流　半弓　縫針類

蘆屋釜　鋳師鍬　佃　唐織錦　唐織帯

生絹　襖　金銀箔　高染物　鷹取次凡笠

中野瓷窯　荷崎錐　久原織窯　舩窯　上座紙

合部紙　髢　朱　眼彩　紅粉　秤

土器　瓦　漆　柳漆

造醸類

塩　博多練酒　雲酒　博多素麺　登羅餅

東京餅　立堂餅　玉子素麺　許茂方　木之餅

煎餅　饅頭　酒　蒟蒻　豆腐　寒具

製薬類

阿伽陀円　透頂香　停腔　井黒混元円

土石類

金銀　古所山螺殻　白砂　一雲母　鉄砂

焦茶石　水精　粉彩　瓷盃　五色石　まくす

燈石　礦　木葉石　温石　浮石

禽鳥類

鷺　雉　鳩　猶子鳥　唯紅鳥　いすか　鷯

鶴　鵯　鶺　一鳥色　家鴨鶉　鸇　鷲

鸕鷀　ひと鴫　鵈　三光鳥　蒿雀　川鳥

燕　ゐなくあきい　鴛鴦　水札鳥　都鳥　杜鵑

信天翁　温鳥　鶚　方月　告天子　鸜鵒　鶺鴒　鵲　嘴太鳥　鵈　鵂鶹　四十雀

鶍　鵐　鵆　むくどり　ひえどり　つぐみ　よしきり　かいつぶり　こがらせきれい

みそさざい　すずめ　ふくろう　鷸　かもめ　迦羅頻伽　きん鶏　孔雀　鳳凰鳥

毛群類

馬　牛　犢　犬　牝牛　羚羊　海獺　膂

豺狼　野猪　水獺　貂　鼠　鹿　狐　狸　猫

鰐

河魚類

腹赤魚　穂ノ系　鯰　鯉　鮒　河鰡

みつち　かめつき　鰌　鰷魚　鯇　鰻鱺　鯵

金魚　鱒魚　鱗　鮭　鯥　鰔魚　鯰魚　鰕魚

海魚類

紅鬃魚 鰣鰊 鰤 鰯魚 海參 鯖 并脊

鰧鰤 鰶 鯢鰕 河魚 海鷄魚 鰆残魚 みつ魚

海馬 太刀魚 太刀から 鰐鯖 烏賊魚 海鰩 章魚

海鰻鱺 ぬら 背魚 鱵 いさき 飛魚

介類

蚫 [illegible]蛇 野比大蛤 蠑螺 馬刀 宗螺 寄居蟲

淡菜 海贏 蝸 辛螺 甲貝 光螺 海膽

海並 蟶 蚶蛤 石蜐 栁鰍 はかま 石かり 老海

さくら貝 月日貝 子安貝

蟲類

蝙蝠 螢 金亀子 胃虫 蟬

筑前國續風土記巻之二十九

貝原篤信撰定
貝原好古編録

器用類 衣服 染物附

古へ宗像郡の和山といふ所に[illegible]といふ鍛冶あり
其[illegible]國[illegible]の府[illegible]といふ二の字刀を造[illegible]
其後博多に西蓮といふ鍛冶あり西蓮同[illegible]の子也
[illegible]物の上手より鍛刀を作り上手より[illegible]
當國[illegible]所西[illegible]國吉と刻[illegible]
[illegible]又子を[illegible]入道[illegible]より[illegible]
[illegible]にて[illegible]より[illegible]

よし一ふんの字を刻む　正宗作左文字は相州[illegible]

貞宗の弟子[illegible]にて入道[illegible]
かりより其入道より[illegible]中乃[illegible]とかしかや

正宗の弟子也　貞宗の刀ありとし[illegible]郎ら

弟子にして　刀の流れは源[illegible]と相州の流れ[illegible]

[illegible]乃[illegible]と伊勢の金剛兵衛と刻みて　文字乃

一字を用中二四郎とて　弟子[illegible]とて[illegible]

[illegible]刀と[illegible]絡[illegible]と[illegible]と刻む[illegible]

[illegible]源流なり[illegible]至一[illegible]

[illegible]国[illegible]と此[illegible]

しら[illegible]文元源流[illegible]し[illegible]源流[illegible]

[illegible]文[illegible]三代[illegible]と

[illegible]世[illegible]し　源流なり[illegible]

[illegible]一[illegible]金剛兵衛[illegible]

[illegible]十山岩[illegible]金剛兵衛男子なく

して[illegible]岩[illegible]世[illegible]岩[illegible]金剛兵衛[illegible]

[illegible]世[illegible]の[illegible]

[illegible]文[illegible]し源流[illegible]国[illegible]

しし[illegible]入国の[illegible]信国[illegible]源流と

[illegible]国[illegible]

信国[illegible]信国[illegible]信国[illegible]

[illegible]信国[illegible]三代源流

なり四代乃信国[illegible]世[illegible]なり[illegible]

吉川と号〆し〆吉川家断絶と成名字を継り
吉川元春も是より伯耆国の家継ニ安芸院家ニ
作ふるまい安芸院と是を御世継大友より下され
家継奴ニ名字を給りて其の時伯国吉川氏流浪人
身となりし三田井にて吉川元春と頼り[illegible]
伯国を押し吉川と名乗り九州[illegible]
吉川経家世続より[illegible]ニ相成[illegible]の時
伯国吉川氏と五て家臣と[illegible]経家ニ[illegible]
是ニ末孫[illegible]より以来長七年二月[illegible]
[illegible]月作と[illegible]白鹿[illegible]子孫是
より吉川男子二人今ニ[illegible]て今ニ至て

陪従[illegible]吉川男八三子の内嫡子ニ吉次吉包今ニ在色
[illegible]より吉次ニ二男なり[illegible]父の[illegible]嫡男ニ[illegible]
吉次ニ嫡男なれ[illegible]吉川[illegible]より[illegible]
伯国嫡流ニ[illegible]吉次吉政今ニ[illegible]吉次
三男ニ吉[illegible]吉川今ニ[illegible]より[illegible]
[illegible]ニ[illegible]長政[illegible]
[illegible]白刑[illegible]より[illegible]福岡ニ[illegible]
[illegible]長[illegible]
[illegible]
大長政[illegible]
是子[illegible]福岡ニ[illegible]

武蔵大掾も一子皇帝の時と天下次第利英ら
才積三字ニ守次吉並て三人立たり対に彫刻に
之を沙汰する手利次ニ嫁し利英ら弟利平と云子
守次守次か子守直と云り世に波泳と云う世を

袋洲

日根と長政弟乃始としにして信国吉光大和物の
さり長国ニ在く其国をは基なし其京も其
乃らくこしし国付云と其子直に相乃と云
其後兄乃内に美え云て国付と其子直に是なり
薩摩に日根乃弟子多く居り皇国に係て
本竹の云と刺りて家乃内に大世付と云て風

已下文字多く武備に使用

泉源

信国小坂と是次守次写と化け銘して用ゆるを
注
岩井伴帥長勝光并の主なりホ流に長猶に也
注と化し事と云ふは原山岩井高田門と云て子孫
其上主宗義し長政長勝と東より伝え相国と
伊勢と美濃の云々若狭の信と長勝氏を
又子則又其子天正其主左の家勝とあり
又之勝る井伊時沢と云本より伝し伊勢かへ
三むら玉乃兵ら乃長して久次其子此に家れ

聟源七次郎と申す者久次郎長村良三よ
して売出し候ゆへ吉三良の弟乃後と申者を
今手嫡の嫡男也さし候よ仏の後繁栄
り申申三郎と申す者より今学す宗者の子乃
得手也家名を仏ら候

島流

長崎男乃帰家別姓村より流豆と称して福岡よ
おゐしか流流と仏ら候ふ事亦今より福岡の町よ
而こま候小流大流弟申まで限後
ら也

平ミう

長崎の附より某良三郎嫡男長崎を候ける
吉良の原らとて是法と和り而て作り出より
此手の角申を海鍋の能乱して仏乃木瑞乃
吉三良と稀世に流そそまらく出て用ヶより流を
出まう乃創法称して吉称仏乃らる宮土仏ゐ
まあさ也吉良の才手候良三郎本手乃
水上源より本家良乃才子源井豆蓮要字四国
三ゆとふ今まゐてうけて二ゆてぬらせん
九日かあゐそら間乃らより長し夜乃らい
陸まうて事まうそ座まら乃創法座りてと
まうこの仮之書うて類所其運用と利かる

鋳師録

筑前国生て鋳物師にて古代乃釜ハ彼[illegible]に色[illegible]てうし
[illegible]釜鋳く[illegible]関より[illegible]りてあ[illegible]名人[illegible]の好
みて[illegible]にて[illegible]ひしある[illegible]て作りけり

芦屋釜之

昔より当国芦屋といふ所にて芦屋釜とて鋳物師のあらたに
元祖より元弘より西作して上手なりしと云[illegible]上栄
桐の紋の釜を鋳て当時に至る[illegible]山城[illegible]桐と
称ら[illegible]名作と云ふ[illegible]ともや山城にて[illegible]し
是山城にて[illegible]世に[illegible]桐の釜として[illegible]人の[illegible]
[illegible]八世釜をり鋳をり上[illegible]国[illegible]釜とも

名[illegible]芦屋釜[illegible]方[illegible]の釜[illegible]
[illegible]作[illegible]名[illegible]とも[illegible]
[illegible]長[illegible]長[illegible]ありて[illegible]
芦[illegible]りて[illegible]かりしハ[illegible]
[illegible]にて[illegible]にて[illegible]
[illegible]にて[illegible]より[illegible]
[illegible]以[illegible]用[illegible]長[illegible]
[illegible]より[illegible]芦屋[illegible]又[illegible]
芦屋釜[illegible]より[illegible]
[illegible]なり

鋳師[illegible]

歌舞妓と称する諸芸を集め是を集めし是を始めて今合
町と云ふ是天正の頃の町にて候ふ木屋町三条下る町に移堂
移りて候ふ今はなしと候ふ

祖

隣の町竹若と云ふ者の家にて剣術をもて世に行はれ
芝居と申すは是より始まる男子なくして天文十五年に藤原
氏の女子鬼松と云ふを養子にして鬼松と号し竹
若左衛門と申し四郎兵衛の子九郎右衛門
隣の家より移りて後この名物と成りて京の日本一の芝居と呼ばる
しかれば天下に名を得たる国中に名を取り月日を送る
と伝へし頃より後に義太夫は剣術を以て名を残せし
関東南方へ参り藤原氏より竹若左衛門家
是は一町と竹若左衛門と云ふ元和年中より細工町
に移る

芝居始

五條の橋の東に座を始め上より長田
隣の家の蔵の家を始め初めて武家として阿国
其の家の下竹の下なる所の名と長の頃の事と持
太夫と云ふ者の名と云ふ竹若左衛門家是と
京の山にて蔵の是より竹若左衛門家の絶えし時に
のちに其の名を竹若の家の蔵と竹若左衛門家の蔵
より蔵の家の蔵の下の家の下の家の仕を移す

織帯と申し毎年十月國者より江戸表え二種献上
當國武代官市にて

小倉帯

右ハ申し伝ふ反物小倉織帯と申し深く
久留米ハ同じ様ニ國中ニ而毎年正月
十日江戸ニ上る

生絹

竹田より織出し五百疋程

佛

日もし石佛なと名物なりしに
須り谷にて三体出候て

にて佛たる其以前ハ長の國かも
國にて作り給ふ
乃其まで佛にあり佛え其より
一体づつ佛なり佛を作る
佛ハ今ハ尊ふ佛のなり
其の國より

會津白布

右ハ國にて織出し
なり

蒔絵物

桐村山口村にて四百余人有之にて

苗と云て保や豊後より苗を望み来りて傚
河内の宍戸家の末々の徳川殿仮に付て其子ら
名乗して又と云て十左衛門とも

あうえ驚き品

まれ横之部将早乃の長政云乃兵と[illegible]鎮将
人鮮に[illegible]れ早中し[illegible]驚きて[illegible]兵ちよ[illegible]
[illegible]と段て[illegible]の[illegible]驚き[illegible]早乃[illegible]
まうの家人[illegible]之て[illegible]兵早[illegible]所に[illegible]井土と
[illegible]付乃石に[illegible]驚き[illegible]知早[illegible]八[illegible]
[illegible]し[illegible]早[illegible]長政[illegible]之[illegible]
[illegible]家[illegible]し[illegible]早[illegible]城[illegible]郡

[illegible]にて[illegible]驚きて[illegible]とし[illegible]後[illegible]
[illegible]之[illegible]にて[illegible]しやて[illegible]
[illegible]之[illegible]横[illegible]の[illegible]
[illegible]死[illegible]の[illegible]小[illegible]早二[illegible]
[illegible]の[illegible]なり[illegible]
[illegible]八[illegible]て[illegible]し[illegible]二の[illegible]と
[illegible]水[illegible]八[illegible]
の[illegible]し[illegible]の[illegible]子の[illegible]
[illegible]にて[illegible]後[illegible]にて[illegible]て[illegible]
[illegible]て八[illegible]又[illegible]
[illegible]の[illegible]はる[illegible]注[illegible]と

正長の比より末の國の男白呂に窯を始し有之由
外様の新製と流様より其名世に知れ宮内に
高名にありし窯跡を作る其子正左衛門なり [illegible]
備前又三ケ所を称ら新右衛門 [illegible] 其外の [illegible]
泰 [illegible] 鼻 [illegible] 藤 [illegible] 私の末を小
笠原山城守 [illegible] より [illegible]
国 [illegible] 日附 [illegible] 其外の [illegible]
以下 [illegible] 上 [illegible]
[illegible] 川と同しく [illegible] より [illegible]
[illegible]
次左衛門 [illegible] 享保九年 [illegible] 郎

[illegible] 西市にて刻銘し寛永十年の比
[illegible] 合 [illegible] の中村の田 [illegible] 山の [illegible]
し寛文七年より上 [illegible] 村にて刻銘せしむ
延宝 [illegible] 福岡乃南田 [illegible] 村乃東松山にて [illegible]

中川 [illegible]

天和三年 [illegible] 上 [illegible] 山 [illegible] 村の南中 [illegible]
市にて [illegible] 作らし [illegible]
松浦 [illegible] の [illegible]
[illegible] 五 [illegible]
用 [illegible]
[illegible] 派

弓の細工は高倉村に出田といふ振袖の刻をよく致の
梓をつかひ上立乃用に中にも根の利
き事もあり林古法を以振袖を随意
次第なりて佐々木乃振袖にありり是又能
留と呼ぶ事をゆるしけれ出留振袖といふ

久米斎宗

弓の細工は久米村に振袖を作る振袖作りは
適度にて刹刀なりの細工を代々に夜国
代継ぎて男子人各家を分りて持ち
とたりの

船宮込

中々細工異なり候にて刹刻上立の刹刻精しく候
公用にて作りしより好みをよし

上紙

中年上流細工の内諸々にて細工

合紙

中年細工の内細工付にて漉く事
多くの子紙に似たり上紙事なりし
隔て上漉をも別々にて
是も上山紙にて心よりしよ
より

簪

秋月の町にて刻多葉粉国は大坂国へ多く出す
素麺諸国にて製する事博多より出る多くの事より
此より福岡博多其外国中にて出す也多
しされども秋月にて作る者は民五の番と
思ひ事なし諸国へも出らるる今も多く出す
多く出ることも

麦

博多の名物福岡中にても此中に製する
と他国の人も博多にて製して是を出す
後京の米にて日本より博多に出る
まで是を残して今に此の名物なり

あかく種子との博多より出る
胡粉
五ヶ所千年村にて貝殻焼く人の家作る
白粉に胡粉也なり
白粉
博多の町にて創るところ五所あり
梓
博多中にて梓の形を是と作る又之を
あらためて以て出す
土器
東比恵村にて作る土器の生まれ博多

又糟屋郡志賀島村より出る近ころ出る多し能登ニ劣ラ
割ニて出すなり

亀

博多生の浜にて亀の卵生する時分何方にも出るも
数多くる亀の形を作り表糟屋郡
又那珂郡宗像郡其外所々より出る也年々

干鰯今出る所也

鱶

粕屋郡福岡博多ニても多し此所ニ取り其外
能古島等より出る

漢和の材と用也

海

日本第一の其外より稀ニ福岡博
多し

海松

海辺ニ多し山村ニ出る所と古月より
つくる也浜辺ニ福岡博多ニて出る
山ニても稀ニ所と小なり其所ニ多
し山中ニ出る

遠賀郡

長崎及び外国の漁其外海辺ニ出て海と
多く焼きて九州の民今も用ゆ

事を穀しはりたりて手し 豊後大友なり其比
の時も白井と云者梅田の屋敷に来りとさ三文字
然下より送りありたり右風味かくの事ありて出船
是を事なしと云ふ 博多にてなし直同様に
其より前日向より博多も造るる所あり
事も毎日のゝ事ありて海味あるは不出方に
おもりは此酒の風なからんとなくし 此年に今博多酒
名物なり

博多練酒

其後又練酒の如くなる物をも練酒と称し 名
りてこしたりとて 練酒とは不精と申用ひて候

練酒とて小田原の世より存し此しより来まで
是とて牡丹花より信と三号を記しまた酒の名の
称しりなき 異別の事を称し大徳の里群ありて 当之
とりありて 宗信之 天正十三年頃 宝永六年迄
百五十年まで入りて 宗信之時 日酒又ありて 廿五代
名々の其子孫ありて久しく 名を売りて
其より博多に入て小田氏と号の事を申也とかや
今は別家となりて 然中其家博多氏の家に譲
上京のほか其流を伝ふる者なりといふ 其久し
博多と云て 戸別家の稽古と初の日酒せしめて
代都よりて是 博多来迄 代都の酒屋とまゐる

家中之者共八家老共より御当家の養子に仕候を
雲州より毎年十二月江戸へ献上ありけり

雲州

出雲古は尼子持より構し其後毛利元就に
其後堀尾の信濃守とて此後又京極と
申し其より其子[illegible]寛永十五年松平出羽守
て其後[illegible]松平出羽守より
是を次第に[illegible]伝へ[illegible]

伊予松山

其後加藤左馬助[illegible]
是を[illegible]

白[illegible]蒲生[illegible]
[illegible]

の[illegible]

[illegible]

わらびの根よりとるわらび餅なるに先ず製法あり
その根の粉を水に煉りて一度火にかけ其の中に餅を製すと
なれは是又菓子の内にも入るべし根も又深く埋国
より来り其葉好む人多し是を菓子の初手と云事
人悦ぶ事なりけり此餅製法を施しよりは所国々に
日本のうち物なりけり是は餅の粉を包みて
云多し是は豆の粉をまぶしわらび餅といふなり
八月頃にその根を掘りて粉にするなり

葛餅

葛を粉にして煉りてのち少しづつ取りて
よりて後に又煮て切りて用ゆ

豆餅

豆より来る吉野葛にて一家より製すと
唐菓子の餅の製法に用いし
又是を餅と云 (又はやき餅)
日本の餅の事は唐より伝りて製すと此餅より長
崎より来る唐国より日本の製法伝りて御座候
唐国の製法の事は支那国の菓子に製す法
其の様なし

麦餅

麦の粉を製すと御国にては多し

粟餅

博多[illegible]より西大佛の[illegible]し
納し代郡にもひさしく又中[illegible]東大佛に[illegible]
と利[illegible]二本の[illegible]して[illegible]の[illegible]
万故のなかれし東大佛[illegible]

脇(?)

福岡[illegible]西ノ町より福岡大手町[illegible]
としつ又西町中島町又[illegible]
人[illegible]し[illegible]で[illegible]なり又博多中島町[illegible]
と利[illegible]中吉[illegible]なり[illegible]町にや利[illegible]
男[illegible]西町中[illegible]福岡[illegible]
[illegible]

路

一 東年福岡[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]福岡[illegible]

名品並ニ國産之事

菎蒻

福岡博多の町民にて是を製する者は筑後甘木の宮
之しやく本と称する也其製各専一方行ほ
製せるものの其製に而大に名白くして是を加ふ
新大濱町の菎蒻やとし

一豆腐

福岡博多町に其製造所あり中年来称の人
多りて世人の如く形町にて製せしむる其法精しく
味わひ誠に下町の方も好もの精しく依而極品
専ら其中に於て西町ぷり三文町にやうたく豆腐

名物博多の鯛の一奇にて御座候

定具

博多福岡両所に製するもの多し其製数多し名
所町西町甚多子町厚人町中嶋与五右衛門
錦呂敷の類なれは其数多き故に仙戸味粘
者を以て是を用ひしものなりて粗糖なる
のとなりて此品なりしを年来世に長崎の
上方より伝来て製せし今の其製れ共今其製
精しくなりても世に於ては此品の製にて候へ

製法之事

所加陀承

備国西国寺ニ製し売出ス因人多く
買ふ事にしられてやうやう諸人乃勧求憐皿に
よし日本にても薬方を以て専らとす
是法目胡椒乃将方ニ阿伽陀なる胡椒等
れ秘法を用ゆ安国寺の方ニ八月しか年時節ニ
之れ椒を度伽国より白芳の名よく伝て
派ありよりて安国寺の伽藍の破損なし
是も補なり胡椒ニ伽たり又安国寺ニ庫積
来と制す小児ニ用ひて功有

透頂香

右は元朝の礼部員外郎陳宗敬（割注：中ニ元朝の人也）
とゆへし元朝ニ役仕せり是より佐して大年
宗奇京都へ来り三年先朝の名臣ノ
孫ニて其父ニ仕へし代君ニ仕へ其
秘て後光厳院応安二年来朝ニ而北
に住し文まで京都に居て上洛して医方を伝
へし薬草ニ関ニ而御年寄に勤番を務て
我父のへいより京に下り其名を以て
能中に透頂香を来る人ニ種ニ薬を献せ
降ニ是をのうり勝つてあめて京都に四洞
目の明地ニ帰ニ而住ニ宗寂寺の二方和学
宗ニ入て二而辞て其年子年余りして死去り

秀頂寺と云寺故ニ舎し一方之俗に於中にて
宗敬之信を存し又其ことより五十余年秀頂寺の
供養を修へし廿三人義隆寺を住し又京都より給
五百正弥陀寺をたより京都より西洞院四条之ら
町を住して遠頂寺をとうりて長崇と云文相州
当宗の遠頂寺より安宗氏政の時北条家保を
当宗寺を建立しうつし此今まて又子孫伝へて彼
代に住し秀頂寺をとうりて家業と云ふ秀頂
寺の秘方に伝来より異立をなしこと

樟脳

樟脳生て多く割製して樟をも入すて是也

丹田家温元丹

五十銀丹田家村の農夫に七八十年以来日黒観
しての仙人より来の薬法を得業殺方の病を治
ふ性之銀之三十人銀の農夫に不思議の上製法
其月廿五日をなして是を輝き文とする石家にて薬を
割製法を以ふと云福岡其外国にも用ゆるもの多く是を

土石類

金泥

元年国中下にて四ツの由来年から阿ありあり

古阿蠣殻

永濱郡姫多村の上立石山の頂上より大石す

つり是ハ京金武士也是京都山城国
石山ヨリ出山上ニ坊殻の名所也播州にや所ニ有
高山のよふニ鷹殻の名所也其の所ニあまた候
今の天下ニ是所より四方へも出ル所也是ハ宿長
にれハ去年不祀

白砥

五市山より出る石を砥也四方ニ有ル所ニ有ル也
砥ニ出ル石ニ而白石ニ而京都ニ而も宝也
して也出ル伊予国ニ上総ニ有ル秋の頃ニ
有る白砥是ニ而同し但し伊予砥より出るも有

雲母（キラ）

是ハ京都より出る山より出る有所也

浮砥

是ハ京都山城国揚浦脇田稲荷山之内其所ニ
伊賀近江の浅野町川内稲荷之所ニ有
かまなりふくハ浅野の浅所ニ上浅野ニ而
砥石の浅野浅野ニ而出国乃浅砥其ニ而京都
江戸乃合砥ニ浅野の浅上所ニ而其ニ而是
能しかくの乃如くの浅砥と同じ浅野なりし
在所乃其外合ニ有あり而も是より出る小刀
庖丁等と又かくニ用申

真米花

上妻郡深川村八女郡長ヶ平との境山と上妻郡四里ある
の境にある青黒色の石にして黒色の模様たるか
石よりなりたるにて岩石同前にして是とする画
大きなる石にて此土の上ある石より出る樹黒色氏の琢乃
黒色の石ある所とよふ又俗名同郡上の山下
久留和俗有長ヶ平と云ふ鳥毛となるを硯床と
なし黒色と一種在りし産る西の方の石湯軟
硯より出たり今城用て是をたつる

水精

下妻郡木屋村の山にある石屋と云ふ里郡御田
村の山ありて其上に是を採りて刃物とす専ら和

水晶ともいふ是を用ゐ府の事の手に取とり

蛤粉

陰支にして蛤粉とあつかひ磯にて粉とし底にて
又山との化とにかく用ゐ黒と石灰とも用ゐ里在
庭に于周にて石灰と用ゐるとし

鷺墨土

上妻郡中村にありし福中村にて鷺墨と称して
是等の辺の土と庭と漆とし来九のにてしに中村より
あのつからなりし九代よ来たりし夫郡の守とし

白膠谷

粕屋郡久原村の山にある村民是を刻みて作とするさ

是ハ民用ニハならす　然れとも豊後国速見郡ニ石
垣口と云所に硯石と云あり　別府と云温泉ある所に硯石あり
よき石の出る所を郡にて見出し　かゝる某　此石を硯に
こしらへし也　硯石の名あり

金山石

出雲国仁多郡横田村大原のうち　金屋と云所に金山石
金の出る所も此と一石にて是をなし　なかの出る所の土石
ろくろに掛て　[illegible]と云石に隠たり　今ハ珍重にて
もちひる人なし

土佐石

土佐国安芸郡奈半利の名川の中ニあり　江別名石

村のほとりの影なり　土石に化して名と云物也

砥石

土佐国長岡郡本山郷の内の北の谷ニ　土佐国高岡郡の山
并　山中に在し　村民是を取て　是より出る代用の品を
用ゆる　津野山郷の名ある物の山にて　上下の品細
多く出し　其品の上の良き　品質に勝れ　其色の美しき
なるをたくさん出し　民用に使ひ　古より有名なり
又　今も其の石を取て　其跡一段として
山中に在る　民是をとりて　使ふ也　信用に使ふ所にて
用ゆる　古来より有名なり

硯石

上松浦郡八束村より出る是を焼て石炭と
薪ニ用ゆる事を得へしといへとも土掌
石炭と云ふ臭気有て是を取り小童らを取り害
いまた好さく事なし是を売ことなし

木葉石

石中に木の葉の紋ある所藤津郡田代太良村
山海の間より出る割てみれは木の葉の形ち
多くあり中にも分の葉の細なり又大なるものあり
是も後の日にはとりたる

温石

同上山中より出る焼て温石とあつかふ又彼杵風呂迎
風呂の上用ひて病をとりやもに

蛇石

同じ彼杵郡より出る色甚黒し蛇の如しとまり之ヲ又上佐川下良
其下水池の所てまたりてなよりもかつていても是るに

同所

蜜

貢香郡

国中所々に蜜の集り和多くしなる其内にも黒髪郡
よりも良くよろしく其名によりあまり名高し之よりも集り
事も是多くし此中蜜の時の時諸州より出る
上集りし是多くし諸州にやかも貢と蜜の多く

集るところハ寺院也 在し白鷺又黒鷺これ
鷺あり

鸛

鸛ハ鷺に似て山樹に巣をかけ平地にすみ高樹なり
巣をかくるところなハ人家あれば害あると国になし
其鳴声四里まし先数の年と
多くなりより

鵠

白き雨に似て住し

雁

大きなると候とて

鳧

品類多し真鴨 小鴨 尾長鴨あつし 黒鴨
なり 赤頭黒鴨二種 又外 口廣鴨 多くは
如く其外 若きの類多し 王鴨 大鴨ハ
無かり 小可食

秋沙

又鵚鳥ニ多く 其ニ何ふ

鶴

国中雨ニまれ 度ニ似て 一尺ほど 其ハ長し
此国ニみる橋 羽の又ろかしくけし 巣又ニ羽
那所ニ見 用ニ又 鴨ニ似ニ 尖所 是ハ 比より

国家よりつくし渡るべくなり

鷹

鷹取多し鷂児鶻雀鷂雀鵐 年ちふるや
むら又は有日内年をしてよき鷹と新かへり
又ちかく随所より異喙ちらひ来るあれ共
朝鮮陸外国より九月末より冬まで里よ
来り 二三月又外国より鷹を八九月の比唐阿
蘭女山若鳥取りし子共鷂と取り渡来山まで
往来かけし鷂し近年よりと往ゆきて多く来る
自然とうら渡来候にて毎年集まる由
此の後こゝ果有中の多し外国より来る

鷲

大鳥なり尾羽十二枚よりて十四枚に小六
大鳥にて

鸚鵡

唐倭取る為にしとり而鸚鵡し郷と為名民
鸚鵡帰として来たる事多し実禄の十年五色に
和三年より廿三の鸚鵡よりも年一月より年
毎よ鸚鵡をと聞て来也龍有り見来にて語
やくもむそ温し

鵲

大いに有る鵲の縁大に信るなり植やうなし

雉

西国山に多し大さ鶏ほどなり

鵁

鳩の類鴉鳩鶏に似て〳〵よりは長き尾四尺

又鳩は大さよりと補し

鶺子おう

深山に多く秋の山中に多し見ゆ文字にあ

耳に多くちて雛と事なり見るなく

群集して見えし五より見えり

唯紅鳥

山中に多くとしる事仙にての人と見ゆよ仁と見え

おほく山中かに棲し

いくら鶚

山中に多し木にとまり大きさ鳥ほど白くいふあり。

鵯

やまぶき山にし羽文羽胸黒大かふかありまた

とーき尾白しきれり紋どろびたる声多し

羽ぬかし

鵈

ありていこしたくていかなり見ゆすし

鷦鷯

鶉

田中市にいます多し冬中は稲を多く来はすの頃に

多し其腹は白黒なり又日夜水常村なり云
より其声は生に亮なり

鴫

西ニオ乃多く又南の地に見ゆる形色をみてやくきとなる者
とり山中常其以て大あハうつりよ似たり尻の毛は
数路に渡なりき乃の数もし千

三光鳥

上比称宝体山高原山並二方出たる有其大さいにも
こりつきよこし鵲(?)青月星とよふ声
似たり花よ三光ニ名付尾長し是称烟々る
異なる千し

蒿雀

青ク白頭身多代類カクりまなる二鳴り
るとも王殊ましし血をとしや下血を止毒出き
しなり年し其功多くより

川鳥

西ニ山川の辺ニ栖む其形いなかまに似たり羽
能ふ叩き夜慮と伝也

燕

大ふ二種有大かくるは宅に巣をつくる海燕と
まま文なのつきなり大きし尾上あかく海に
ニ又印たる毎日異の者の燕よりハ高く腸方

りう宮と申て黒星あるは専らよう系の

鶚又鴟鵃

海鳥也羽ミ黒く嘴長し大サ鳶ほど又とびに
りふ方は嘴よはくして形ちいさく小頭に見し

鴛鴦

山中深谷の淵に住む

ま札鳥

大き体のこゝくて尾まて羽白くして
嘴黒く叉尾長く冬の月雪時は木肉紅花喰しと流也
又冬の候に用て切かたと云り

卯鳥

嘴黒く赤し白見根上て大きさ鳥形かりし似た
り口嘴深はかれ飛居て羽をはなち鷲やうに腹毛し
五指の深て上カミあり

秧鶏

鶏に似たり常は信心和俗水鶏と体し大なる
嘴とはれ雪と五常に方三寸四五寸の多き
と和名をひなしたくしと訓す

信天翁

日本海中に住し大きさ鶴より海邊にすり羽根は十六
時多く入こりして死也丹後若狭は不及
り嘴長つゝていれきの云文ゆりよ日本の事ある

右の書に出たり

温盞

此鳥ハうなの義ハ酒を含ミ煖めてかの器を
もつて用ひ来りしと書ニ一名としるし呼出ハ
但文字ハ其字を含ミといふ物を用ゆ事を伝て
含ミ温盞を含ミ受て用ゆへし日三度是を服
用しからずハ酒を成の器に注とり

鵜

昔ハ日本ニ無し実ハ本朝中宝永の比より来ル
其後ハ是も五島にて多く飼ひ渡りしハ土佐
其ほかより来りし鳥にて尾長く羽黒白成也

方月

世俗是を極上の酒とて中華の書にも記す
ある書に方月と中華の書に見えたり大なる
小なる有大なるハひきい白く小なるハひきい赤し
小なる者ハ文字をなしたる小なるの類秋来より
文々中に味有て是を用る者もありて其用ひ来れり

鳥

鳰 鴿 鵯 吉天子 拄鴟 網眼児 山雀 罹檻
鶴 鵉 鷞 鴝 山鵄 鵜 鶬 䴔 莫
こくり 鵈 鸊 鶬 鷹 鴗 梟 鶦 鳴 鵏
鳥 鶸 鴒 鴛 日外ニ不有り

遮羅鶏（シャラケイ）

蕃国より渡来りて長き候ハ者自黄国鶏に於
勝つ事にて外人是を其事にて今は此国にも多く又
鳥羽鶏と云ふや不鶏者其国より来りの人も長
候ハ事なるをも名るべし

鷺

血年佳き庭国りやりて名ある由の人かなるべし唐を
あまりも上方は長く候へしかも其の事とも多るべし

きん鶏

蕃国より渡り来る名を長く候ヘしり寒さし血年に国に
ならし

孔雀

右の鳥子を以て庭に候ハまる名るべし

同じく

京都にも大唐国より来る年毎に異なるまるべし秋を
以より来り来る以上ある血年来まるよりも又也より
てらもまたもる名は国まありて多くまたを少なし
まし以て花に空に候ふまで大年帰るまで支
月には候も又ても雨ら又は故にしても子をうちやきに
其名は国兵の時の候にもある年内まである

乙程数

馬

故市とある今の年し
牛
砂偈に梵字羊定無きてなり今は丸し
橡
山羊とある宮に也宮と云也へなりし五へ膃腽と
似たりとしみてけり
犬
月間に尤も色まもの結職となる
水牛
かりし
五品里大般若経の中世に…

羚羊
大般若経山羊とある所をかもしかといふ
麋鹿(シカ)
私呂俗文字集鑑ニ大鹿なりとあれは
麝
程とは仏の楽しく家にたとし羊なるとありや中世に羊なる
羊とあるへきに羊となる所て死なし云福をとる羊にけ
にはしたとし
軍とよく云へくかりまや山とまて文てし
往生論に羊にかりて井も枚とも五字般若経肥而
補品の経にありて往村とありてあると書きとしとと之
年かりて教と

獣類

野猪 鹿 水獺 狐 狸 兎 鼬 貂 鼠 鼯 杯有

同 魚類

鮎かつ昔年貢として相廷しより昔員数を出しと
云り今上秋川より大栗川辺まても[illegible]月是こそれ

鰻の類

形ハ[illegible]ハ鮎のことし中鰻なりとニハ別に鰻とも
いふも鰻の別種にし鰻といふ又川にある鰻の物より
大きなとし数三月の頃秋川の末河又服部の
大ケ谷の川早く川の上[illegible]飯場[illegible]ともあり
是を[illegible]味[illegible]長[illegible]八九寸ある

鰍

秋川 早く川 秋川 秋川 大栗川 上秋川
[illegible]川 [illegible]川 [illegible]大栗 柳川 [illegible]
川 [illegible] 新井 [illegible]川 [illegible]川 [illegible]
[illegible]川 [illegible]川にて[illegible]小川 [illegible]
[illegible] 秋中秋川 河川の鰍形大[illegible]して
[illegible] 国中[illegible] [illegible]川[illegible]
又川鰍[illegible] [illegible]河川[illegible]上秋川
の鰍[illegible] [illegible]河川[illegible]
[illegible]鰍[illegible]役納小[illegible]

くゝ経を以て是又小川も小川を堰とめて盃上元
上在川除悪不之形ま余り是つゝのて石村策
美之海と川の海より川上へさかのほり秋の末に生を
海へ下るていかなる由にや其深をうまくして
是谷川も尤小白を用てゐる秋の末よりさゐ雑
とあり子をくるミて小海へ下りて雌雄の堤
かなり子をも死て海へ入死を生て生出
田へ入其名ありて鮭とも又鱒とも同しといふ

鮭

上庄川ま黒川氏家川黒部川其外出生国中の此深
まりてと見らへ五十里よりも上は経出ぬ又一の宮深数

白川は川より鮭多く其味宜とし

鮴

下川氏より鮴千尾余能く数千尾つ此前此大
として其実なり京に吳其外尓能く千尾鮨なら
大なるは長さ八寸幅五寸ある目録にもいへ
鮴ま多く尓よりつゝり其外国中和にも有是其子ある
あつとふすを子らへ粕しに三千尾を重して村の小謝
其味あまし田へ入るそしもも又吳ふ此あまりふ
こしても示し

河鹿

千曲川と黒川其外大浅川よりも常陸に続く

陽より何程も同し 此鏡に是の自然の初出
用べし

ミつくり

山川より出る形雑に似て色は黄黒きを上とす
はまて細にこしたるを是とし 又何ぞたへ
とらふ

蜀つく

山川より出て能似たり 大きに奇て若の中にて
うちつよとあつまる 色中にかくる鏡を用べし

石斛実

山川より出る也 似て大きに口赤く 是も大きに赤きを用

あり小さく川出に似たり 鏡よりも味七し 大山渕
にとふ

沙い実

西の海 東海 南海にも出る 阿川より出し又海より
ありて川はよりは小にし 病人に防を両様にして
用し

杜父実

其の民俗のみなよしとしほうさうも是は杜父実の毒
みの血の中てうらたつもの也 能用くれとしこれ
根のてい大きやうらふ 西との川にも出し形も色
に似て大和口にも有し

せいくは

如魚之杜父魚に似たり色にてこゝらか黒くして

しよく味なし山川にあるし

鰧鰷魚

川にあり黄赤二様有其まゝに似て甚小にて小け有

唯あらしころえりかきく[illegible]又さるくふと云

鯿魚

好河川又は大川に生其長サ二三寸

川下より多く上る時より上されとも白魚たるとも近顔し

白き胴鰭に斑点ありてそれより黒く摘て

今はとも五月くらいのものなし

鮗

其味なし

鰻鱺

大海より江河なとに入也

鰍

西の川に多し大きさ二三寸へ大さ[illegible]有り

金魚

元和年中異邦より渡り今の人家にて養ふ

緋魚の別名又金魚銀魚の名ありて玩し偏あるて

これなし向く多くあり

鱭魚

大なる鯛の頭をさかしほにつけ置ところを白ぼし
後かり
　鮊（シラウヲ）魚
杜父魚は越前白山の雪水三月末雪消河川に
河川へ落るを川へ上るを網にて
取るを[illegible]魚と[illegible]の[illegible]と[illegible]
其の魚の名を塩辛[illegible]
[illegible]いふ也
白魚ともいふ也
　鰍（カジカ）魚
[illegible]国にてはなましかなの[illegible]といふ也
[illegible]にて[illegible]河川の[illegible]を越て
[illegible]白山より落る[illegible]
[illegible]鮊魚をしほ[illegible]
[illegible]鮊魚を白魚と申し[illegible]
[illegible]しる也[illegible]
[illegible]水魚[illegible]
鰍魚[illegible]
　うた
[illegible]
[illegible]
[illegible]

鯢之実

相楽郡金[illegible]より川[illegible]川大[illegible]川

あり郡[illegible]久川[illegible]山川[illegible]橋[illegible]川によ

りし[illegible]となり生[illegible]なら

天日[illegible]

鰍之実

淀[illegible]川[illegible]川[illegible]川[illegible]

此年[illegible]とありけり

淀之実類

江[illegible]実

淀ハ三月より[illegible]

[illegible]

相[illegible]

淀ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

三里[illegible]より[illegible]

[illegible]

[illegible]

海部[illegible]之実[illegible]鳥類之実[illegible]橋之実

全[illegible]之実[illegible]

[illegible]之[illegible]

田中の海にて取る物多し就中福岡住吉浦の
産味ひすくれし紀州にて味ひ殊に勝れて志摩
伊勢にても取ともこれに劣れりと云ふ

鯊魚

海中及び大川などにも多し其中大なるを
よしといひ大なるを上總川中三方川利根川にて
名味ひすくし海中に住むは千葉川のものを最上とす
なさくして又は細くしてたくいなり

海参

東海三河尾張今は伊勢紀伊から多し
関東にも多く冬春まで取りて出す

いさゝ性温補なし

鰒并脊腹

春より夏にて細く小くして取る文夏の頃より秋までに
漁となりて多く取れ其後も海清浄に漁人
取又夏より秋に至り其外東の浦入口の漁あり
和中よりも取る暦脂の脂あり其後を慈し
鰒実を煮る其脂を塩にしてつらなる事
恰も味をたり夜乃暑味のよし住所物産の事
しも味たり夜乃伏見の暮しよ東海道を海人
のたく火をたく漁して実を専にしてまて停止
且口出しき多く頼みる漁人のいさり火ありて

とゐるさりけるのハ吾妻やーし此とかりなりけ以異せし
費し食とて又法をうけし干二尾と一まゝ合て
一さししふふ吾條能と弁法の星ゝ本とさふ
五のまー、し民用とたまけ七月中元のころまて又
錢と易錢二尾と云又私今切て頭二三と經異の
なきとるふ吾和より端より又吾傷とたし務と
ゐし又私分携膾とふ細とて頭を長刃よ味と
易し済よ生くなしのさ味ななし

[illegible]

吾妻よりも内の入海東西七里の所ニ多し
伊勢より参る名を伊豆四日市を日本橋屋

鰒人吾身と能知し其の味より称に出風なされ
無求服とや彼所ニの春まて有し海を有ル鰹
多冥とよ以り五郡不言吾所冥海鰤とや海老有
日本の諸人ハ之夜用まと以不冠にまと日本国中不
ーとし所又川鰹時季と納とれ而上え賢王冥川
しやりとゞ廿日差る松里上傳せ戸食の入江ありニ鰹え次し
わこにて実又湯ほ而吾味ナし夜月味よし
吾小と相混とふ

[illegible]

鯔よ似し寂おやし多く鮎とよ宿布にて多くて
今とて又々石楠色のことし石ニ一名吾やくなけ

とうふ

いられ

是味よし 東国よき構くとも

海鞘の異

大さハ四寸より五極て大なるハ七八寸まてあると

並ハりなれとも八歯有なり九寸の異乃尾よまみなり

人ともをもて煮て食し 樽の内或ハ桶なとに漬て置

平生よし 是味よりも是平生乃味よきよしと云

知る漁人知らさるハかなし かくらも

さゝえ

味よし 性よし 病人食ふよし

うつの魚

同しく似て是大なり

海馬

海中の小魚の内まじりて事に乗草なるを[illegible]

たくハへ置て 血の薬となるとも 又は花を[illegible]

よく煮て 薬にもよし 正気を益し 病を[illegible]

きと消ゆ 八尺[illegible]

さわら魚

同しく似て味よろしく

さいら

是味よし かやをも玉子やき[illegible]多く[illegible]

味も成ほとに命なし日比の事もなし何事もなくてもよし

鮟鱇

其味美酒の肴なり腹より取りて三月比迄能々民の食として
気食これハ民の傷となるとみ

烏賊魚

いかの気よくなし是よりいか又ハいさきて無いの也
不足とす

章魚

たこの気よろしくいふたこ鱆魚袴魚鱆魚ともいふ
脳取のしらくなきの多くし味よしとしら気合せし
もし八腹より傷にも年々の不足なる

海鰮

田中海浜より四方の多くあれとも秋には多くして
食にも肥としてつくりとて味も高き也ひとつとして
其味の田とらふの時は目て美味ともいふ
作ることも浜に居てしてひとしとも冬りては
食にかは多く為海を取ては其とて
俵にのこしてたくの大根を作して夜くもと
冬付てもしきにふ多くの時ハ深く大て家の
浜人もと塩にし田畠のこやしとも安中也
わか深りとふ多分深めと作りてもと
ろうそ利を取のそして味秋冬ともあり深てて

長年毎年より小児秋より夏秋の名の附を
猶よひさし保とをして是まて其ほかいわゆる痢疾
又は氏甲状の食用よそうに民用とゆる事也
廣し九丈年ふ常とも鰻多くとし國中に用
每年用ひると愛して皆々痢の利甚多かもし
年治は保ちに追年を又多くして濃人用之と
こうよりり

海鰻鱺

うなぎに似たりかまはととしてよし

あなご

同類多しかに其のつきのふさハあなごの類なり甚

揚子に津の性次由とも丹後かし一のし
三十たけのふさゝしに似たりそれなり毛又ふら類
なりやうのふさんとなまさて此よりも皆悪てき死と
なり文部湯でもこしても才らして砂味也も
食とも九ふさの類ハ陸地より皇の形あり
あなごは實なり毛又あの類に其の形ともに民
似て短く其大にして形ちは其大なる者も頭大人
洋にし大に次に至るまりしと頭なる者死
かりま其形ちえまし其一奥極て性強くして兒
助けし長きをえて行水にかけむまで殺皆かし知
様を切ては名内にしてうこく間食不法

めり月しこしほして食して甚味よし海のもの
それよりこしえしはしゝ死きた

背魚

性味よし小骨多くあやまちあり背魚又列行に
難治の魚なり腸をとり

目張

春三種有味よし又列にかうきらうはうな教へり
口狭くしておよそ干し目張より大きく

鰔

性味よしもし病人食して一種となひらくき
りん骨ましてまし毒なし

ゆきすい

鼻長くしてうす似し青色し長さ六寸ばかり
しきあり色さし

あら魚

背多く無毒骨しかうき

赤鯮

鮑

国中海の海浜に出の岩の海中なるを取て名
岩多く又磯にもあり九国中なる女の海
四季の外居る海藻にはかり浦こし其の海
也年中人うるかくまし鰒をとり味汁

鯱を切まま深海へ入ぞとりしらぬ要害ある可内法
さらバ備世云云又要害あり 世人俗に碁の吃噂ハ
上へ下よりと味こてらいつてま天下の事なし但鯱
とれし公儀よ大名しく海中に入はけい味や
方くより云ふ俗ニ世間の咄具より咄問き味好

長蛇

是を人謂とれて様よ切し千里を切のしと松之
次ハ但たりといふろのしとしふ路を切まやして長の
しよけぬ大事人国中よ出し是と割ことをよ此之長門
あへ路段をと彼對る所をよ行し事ありいとこら
是と割之として所段にて要々径けて割らせる

のしとハ毎年七月に見了砂ころの大夫と名

壮小大陰

是ハ飛龍の陣よ有四目しまこと年の長四字計
あくよ様て是と此事のちら宗やきさ三ろ五計
ある般の文字路白しく字く書陣文字は陣の陣字
よあるハ国とよりしこそしたてり五万年そ字けて
天と切たとく見といふきりとふ海人是示とて
てよ彼もし元陣了とよ海示四字計保了而よ名は
文と云ふ飛龍陣よ有りと云ふ陣小の名よ太宰
して見方しけ有り国人陣小陰と飛龍陰
代国よ在ししと云ふ但長門國の陣に是をせる

そのほかに佃なり

蟶

西海有之肥前佐嘉郡福富浦に大なるもの有

其の長さ七八寸肉も甚大し

馬刀（ミゾガイ）

此は貝也河津の沙の中に生ず又まて貝

大さ三寸斗り施く食すに又かう貝も上品横ホし

其沖に和くさし小児の白衣丸療と佐賀血生丸也

其ハ甚大なる蟹に生るもの見ること長七寸

かたちなる貝をもて日国にもさ暗殺ホ有

作りなりもやもなし

某螺

海辺西にもまれなし

寄居虫（ガウナ）

又蛤及かりとこといふの殻に宿をかりて居る貝形ならて

のようにて蟹に似たり作り物にも多し砥子（ミホウラ）して食すも

蜆（ミミ）

西海川の名浜中よる佐嘉郡白石川の其を大にし

ても

状は又甚大其田のようにて三寸あまりもあり

螺（ツメタ）

赤ありし佃なり味も鮮腹なる也

蝤蛑（ツメカラ）

稀に今津猶侍り 去年又外にも稀にあり

うつら貝

是は紀州の海中に多く有る也 甘く

其外のことし又希し味淡し

海膽（カイタン）（ウンキウ）

海中石に付て其甲の大さ一寸又は小き茶碗程も

有りて其の甲は栗に似たり針を生て海より

取り揚其甲に種々あり其形色々殻を用の時

物の所にて其の中を取る内を食すなり

せつな貝

其表は所のうつせ貝ちいさきにてよく似たる貝

のくや小ル也

淡菜（イカイ）

いかひとて貝の殻黒く長さ一寸余にて潮先にはなし

其肉は食すへし其外所々にて食す 海より

さしとる事多し 肉をかつくるとし其味甘く

又よし 殻は薬のよう也 又干ても用ゆ

海扇（ホタテ）

其肉干して食すへし又は甲を盃にも用ゆ

蛎

所々浜辺に多くし 其味の海人の取る事も多く

海中の石に付て生る 殻を取て其肉

又海人参の形より其の名まして出されし也能く
江戸の其の大坂まゝなる所其の味を好む事多し
紀尾州の海中大坂の大なる物ありて大なるものも有なき
かきなとし中を小なる物まゝあるを

辛螺

大なる者は黒き殻にて四方に枝ありて其の中にあり
ちいさきはかつきなり

甲貝

ましま似たり是し

光螺 ツ 此貝の名ハ

西の海にて多く有るべし

海膽 ウニ

西の海より出る物より是をとる其の殻は青し
其の中に黄なるものあり是を塩にて漬し味極よし
又利をとる物を上品なり其の味佳なるものあり是に
次ては他の海にて取るを其の黄をとるに至て
ひたわるしとの味は大なるなし其の

海燕 タコノマクラ

堂よりも他様の物にて是を味とす

海中にて多く出る物にて名付る

蠣 ヨメノカサ

是しもとありてもし多し

海岸に付て生す其かたち竹蟶なりやゝ大きし
殻の色はうすくろくとし味ことにまして其うち良し
の事はしらすしてなるし大蛤なり

魁蛤

様よろしなり

石蜐

岩の子といふ又名をかめのてといふ海辺の石に付て生す
形は亀の手の枝のごとくかたちのごとし生て後はきり肉を喰ふも
今もふと

蛤蜊（アサリ）

海河の泥の内に生す肉含は赤として正三月の間よし
よろし肉多し中る事肉おほし

沢かに

西との山川にて生すところに九月未年以下陰
辛くは殊と化しふり此谷川にて目と用し多り
春中によく又頁の中よ大きくして蚋也
なり此あをも山るよきし秋海に大きし死かこそて出る
うちと雑乃生死のしし賤民はこれを食ふ者これ
めてつまみを煮て食ふ此外に異花多し沢蟹の
冬の毎日等雑煮とし陸合にて此よろしく九蟹の性
よろし加合せ
石とり

貝石の中にかまりてあるを此国に掘出すと云

老海鼠

宮城郡石浜にて多くとれる其形なり上に甲ありて口とあり生てより其内に赤し 国名ハ
鼻毛と江戸へ取しかく味よしといふ 美味
寄生 深海石浜洋 其外貝の名多し

さし海の貝

藍浦にて山椒の実のこく赤し 紙なる
ときの貝色 其上手にて此療の事なし
わかのとをり

月日貝

もく二枚合せたり 其色上二方ハ白く二方ハ赤し
長崎浦にもあり

子安貝

人手にもつ貝なり 産の時にぎる也

蝙蝠 蛭

岩穴の内にすむもの 然れ共夜ハ飛去る事比竹林の内
穴の内に多く冬春ハ 夏秋にハ出て蚊を食也

蚕

ろくまき有 然れ共中に内入 其川の足にて大方に
よわり其色 又糸にて返川 秋月の時又石川細

周防にも柑川宍粟川なとに甚多し 樫
頸核此山田の谷中甚多し 六月の頃の暮時より
汁のある多し是もたゞ夜のみ多し 大方陰の日ハ
ことにいつも夜より初秋とまで多く飛ふ初冬となり
陸まても多く有し

金亀子（ぶんぶん） かぶとむし

陸山中より

蜂

数多し 茅蜩（ヒクラシ）と日暮なり
九国中花戦甚多し 毛く飛し 執し 秋の
暮ま又これ吸ひ去る事流るゝし 究憚なと

又多し

巣石玉産志巻之二十九終

紀州産志巻之八十三拾目録

百穀類　菜蔬類　菓品類　果蓏類

衆草類　諸竹類　群花類　海藻類

樹木類　草柧類

[illegible] 下三十

穀類

稲

[illegible]より[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]稲の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

凡五穀之性能くして万人のいのち是一欲彼多
白将くり無年文自三粉米と国表加是豊
此て穀間の陰に分れ於附股多くの山体天
工加やかしむ其後を三と其こより是年くより
陸山体其名と於て出して早米手に作り中て加れ
早陵年に例を於て彼山体の子派今く無年
育月早米と称す早米と植る田地を生年にあり
脱月至に至日稲より稲手と中よいさ遊
植り手早ト稲其の尾に稲なり国表と
其唐人して小本ともろ和　大唐米とこ云長
なら田しより其世を其国より源の其の其命

扨かりして稲を其本より味に以て五月ほと
穂形作りてなる人を用てよし其を危ぶく稲の是
四月と次跡には出つ〽稲卯と先立ち文を是は聡き
重て拾年二千年たんてしかし遠てをこ補えば
稲及び実多くやすくみのりて民用に利有る事
あり稲をとこもり
粟　五穀其れ次く上社ず其に於て秋多く化く民稲
そして利用備るたり
大豆く稲よ次て多く化く故大豆く夏大豆く其
夫ら其外にて早しま大豆く早く実かりて其穀
こまつ其して穀殺を付しは其のらさる附民用と

ゆく
豌豆 日新本より出 唐土より化るよし 菜種
との又大和國ニ多く植て 粉々ニ用ひ 加へ食せ
机ゆく民用ニ利ある豆也 其花大ニ而白し
眉児豆 扁豆の類ニ 莢豆あり 白豆年ニ大
国より来ゝ
稼豆 甘豆なりほゝかなり
豇豆 隠元豆とれく長莢白黒なる角くして
緑ふさきなるありて下ニ長し 又豊なるくて
園ニ植ゆる豆 白赤三種ありつるつる萬豆な
ふまつる ものよし 白黒なる隠元豆ニ同

莢の形ゆりて豌豆のことし 味も菜の豇豆ニ同し
又白莢ゟ児豆 豇豆ニあり手なしと申もの有
のは一年ニ二度実のる
黍 稷 蜀黍 玉蜀黍 稗子 胡麻 白黒
赤小豆 大麦 緑豆 小麦 扁豆 刀豆 豇豆
白豆
葉豆 蕎麦ゟもよく出来事多し

菜蔬類

牛蒡ニ 堀の名所多し 京ニ八幡村よりも出るや 好所は同
越前 丹波の山村ゟ出る 亀井戸牛蒡之種
国々より出る 江戸ニ而 越後の小牛蒡 ニ而よ仙方より 又

山城幡枝長田村より出る牛房味甘く肥て何れ
由田村 往生院 井手村のに次てよし
芭蕉 葉若き時は茹て甚苦し 世俗深くして何首
烏に似たるを何首烏とす 本國より来る別に
池葉肉に而して多く桂小麦の如くよし
又実を煮て乾かしのごとし 陸奥の町出し皮を採り
又大にようまでいさく
蕪 京葉をとり小豆数多し 根葉共に菌食べし
菱 菘有
蘿蔔 冬大根 夏大根の数多し 青
大根 種大根 辛大根 細大根なと有 皆よし
味辛く三月比あり 山守大根 夏大根 甚大根多し 秋冬
のもよし
水蕪菁 手東の園より出る 土生甚多し
其の物を立て甚根を浄てて付廻して食すれハ
辛くして味よし 茎に合し老て食すも見え
和つらよりして味よし 又大かうとてよし
胡蘿蔔 根と葉白二種あり 葉ともによし 性
よし 牡丹食ふ 又食ふ 移せ菊有
味わろく 芹而多し 然早 中出 備乃開
種 根掛り 井村の者 味よし 柳
芹 芹 山芹 あり 其の芹 甚り 味

なり
芸香葉茶よ佃なり胡椒のごとく世に甚だし 性は
辛く平毒なし 毎にあらず 性之辛く冷
壺盧(ころ)(かう) 乳を出し ひさご 百草の上なり甚だ宜し
なり丑の刻にし
葛蒲蘂はきん甘くして胸中より出る物の性なり
よりは土と山菜の類にて多く用ひ口には圓
よく似たる山にも菜を甚だしく玉実より生じつく猶
いもうらいやまといふ物なり 味甘し 圓なる子
蒟蒻(コンニヤク)の類には字を持たず 能く物の類を除く
しくもし 疫ありと云ふこと 塩らしき物の毒
疫の邪気を払ひ 又は暑さに 中寒 湯を出すこと
ありて世に 多く 食の料理にも用ひ 用ゆべし
多く用ゆべし
草石蠶(ちやうろぎ)(ロギ)は陰木の類にて宜しく食すべし
和らげて 又気を増し 食すべし
葱(ネギ)は もし 若く なりて 一文字に
臭気を さし 葉の 生ずるも 又 甚だ
はなはだ 多し
多く 用ひて 熱を 去る 時は 腫れを 消す
なかれ しかれども 多く 食す時は 食
しても ならぬ 物なり この 葉 毒 あり たべる

飢まし家人をぬすみて食とせし物語ありきけり日本ニ於ても
寛永の飢饉より寛文の比ニ及ひて度々大飢饉
有りしと見へ乱なり
蒟蒻の葉を時々採りて菜とし葉もよく大なる茎を秋の末ニ
取の葉ハ干しおき枝蒟蒻と云り 此蒟蒻枝ハけふ又かる
きりて茎を葉を干して食とすへし茎ハ枝ぞ
大飢饉の年ある枝をかるく干しても食ふ
茎よくりしてあつく煮れハわらかく是も甲斐国ニ
月の山田の中ニ生を植えて飯の上ニ蒸て食ふ
まぜて食ふを嘉とし
蘗を大小の枝を根ともにして煎りぬるは大豆蒸して食ふ
此根の末は日本ニ而大飢饉ニ至り施し行
携へてしかりて喰とし
甘藷ハ葉を食ひて枝葉根共に甘味ありて
しそ又のつるの子も三種あるつるつるふ大なり
甘藷ハ薩摩国より多く植て飢を助く民用ニ利あり
甘藷ハ暖国の食なり暖国ニ植て飢を助く民用
ニ利あり甘藷ハ暖国の食なりて暖国ニ植て
三年ニ至れハ暖国の水土ニ合ひて甘藷生
食ふ者白甘藷赤甘藷ニ至りて一種ニ食ふ
多くうちぬる湯ニ浸して乾して食ふ味よし
其根ハ甘く藁つとニ納て囲ふ

又茎は上野根より出て葉大なり根の味甘し都て甘きと
りふ性は味甘く似たる故に茎は赤く赤甘きに似たり
茎ともに食せと
赤甘き根は上品なり茎は赤くして大なるは食はせられず陽なり
六月より花咲く上品にて味甘くして冷なる甘き是より本なし
栗甘草上品果物は似たる上品の根の味に果に似たる
風味よし生にて食して上品なる也冷中温也よろし
番椒（カウライコセウ）青き赤き皮の辛きと作もし南蛮国より渡来れ
子は細かく胡椒とこれ上品中の辛き又物性極めて
辛く烈しき事なる也毒は食を以て過しもの毒也と言ふ
多食をくころし気腹をも痛むとなし或は下血と為し

冷積を破るは此上品也多食して難産を為す也
旋をやせ毒を食せしむ食したき上品（かゆし）
等主となる胡椒食物の毒を消す是又八或
時に血をなす毒とも平治をもつてなり
蒔蘿（シコニキ）甘苦辛温にて食せ味甘し性温也又[illegible]
まつは試して下し
土瓜（ツチ）児草又蔓に三葉有山中亦こ是有相国よ
して根あつくこれ有り一根と垣海に生ず
黄し花咲て実ありして実は三段程なると
二節まり黄白赤さくら黄有り廿又と上品と
早食すべし

蘡薁ハ深山ニ多シ其実ノ形ニツ有六
ひらく茎長くひらきハ付テ大ニ生テ下シ一所ニ
して実の形ニツ有物除へし
葛花 白赤の二ツ有 又長芭白花ハ白く火ニ流ナし
赤大ニ多シ五月まて久しく毒有ト味よし 香ば
毒なり又仁もろきなり
独活家同して八月ニふ付因乃人をきかぬ
性平なりあたゝかにさはしてふ西ノ山中ニ生す甚
苗細く生す歯ニ芸葉莖長きやすし事
春切テ大きに味よし皿根を煮て食し
干し食ハ苦揚くるすし味付ならし性ぬるし

蕨花ハ山ニ生す残候村ニ多し苗の生する物
性平なり子ならハせとり八十ならす村より出るなり
おほきし味甘以上ならさる其根を煉粉ともなし
食ゑあり性を悪し五臓毒を生す気を散し山民
入ても飢を救ふ小なる葛より添文粉まして食ふ
添りまよし
紫萁早春莖を取て食ふ家の湯ニ漬又湯
いかにして干し五臓を炒めて水を去てなす
蕨のことくしまし蕨の粉は味も性も湯より
緑の何時苗葉は性寒しかゝる真大なる家
中ります又濃茶気をや流すホまよし

鵝腸(ヨソカハイ)菜 春月生ず食すべし
莧菜(ヒユ) 夏に生じ長ず 食すべし 毒なし 秋に至て食
する人稀なり 同く食す 泥を去て煮て食すべし
蘵(ヌキ)葅(ツハ) 菜 蜀葵 鱧(カハ)腸 蒲公英 菥蓂
馬歯(ヘリ)莧 羊(ヒユ)蹄 鳥(クワイ)芋 薺苨 水蕨
沢瀉(オモダカ) 蓮草(カハホ) 其外花草菜 大なる多し 悉く記し難し

菓品類

蓮 其名種々あり 東雅物に 請 析傷と
食す 此菓 見る所て 食すべし 此は 其 多き
物也 たとへば 此菓 よく 備へ 其実 ハ 今 菓子と
白花 其花 紅白 其 説 多く 化せし
蓮 実 利 甚し 菓子 白花 浄 深く 若
葉 甚だ 食し 味 十し 其実 ハ 池 一の 用
多し 磨 菓 と 云ふ 白 の 花 腹 を 磨 菓 の 実
なり 三 て 文 て 実 の
葉 蓮 實 て 山 中 あり 持 の 実 河 に 多し
白 花 蓮 黒く して 花 白 なる と 曰 ふ と 称
蓮 肉 蓮 子 と 云 の 其 青 紅 白 あり 一 種 を 種 とし
白 き 花 多く 植 ゑ 是 八 氏 用 ひ 利 あり 蓮 根 を
藕 と いふ 正 花 菜 皆 用 ひ 甚 だ 食 し の
為 菓 又 は 直 に 食 し て 甚 多く 小 菓 子
又 多 し

其実ありの如くにして穂に秋桔梗木村の花に
至て多し是を生ところ人参と茶に用由性もし
又根ハなし人参のかはり是の花も形類の
形に似たりまたハ類にとらふ
沙参ハ和名とゝき十事にしてまた文桔梗に似
なり俗にはつきりと根を日に見れ干しよの
申し更党参と云ふ物の貢物に人参を云ひ
或ハ今ハ人参多なし尤党参ハ武の上に有り
邦上にも有り南方寺ニ多くハ和茶なるにあると
人参ヲ五へつハ沙参ハしかぞ干しまて安息よ
治療ニハ沙参を以人参にも用中にも[illegible]

男ハ利併ハ人参をも云ふハ沙参ニも也[illegible]
沙参ニモ人参を称え我ハ足然ナ君の人
参ニ洗のかハ参ニ不千して九月而に人参
如へ用用物多し沙参ニ羊乳根の外ハ皆
皆其上やし人参を云物甘国にも和きまま
し係若くして性悪し是を用ひからぬ
羊乳根薺苨是を沙参の別種にして
性同し人参ニ代用ゆ又山中にあり
又称似なりといへども人参をいふ不多欄
人参の多亦下にてなりとも甘草又[illegible]
豆るふかりしまのへ人のまふれされ[illegible]

緑れなし 蕨に葉菜の三寸 性ニ稍涼 梅寸
甘(アマ)く花咲て五月花咲し実す 種れハ花咲し
葛(スジ)茯(ハコベ)に葉のごとし 食して 葱にして食して 葉を
茎にあり 茶花とも 根の性なし 白き 米は食ひ
近江 又 種を植るハ 葉の茎にあり 花也 又 民家に植て
枸杞の也

木胡桃 苦けれども 山にあり
新たに実 而山にあり 秋 陽 [illegible] の花 て [illegible]
早く也
高弁子(コシ) 花白く [illegible] 五六月 実白き
葉も又 [illegible] 一種あり

蔓荊子 五六月 [illegible] 細実 [illegible] 後根と
[illegible] 山査子(サンザシ) 山に [illegible] 一種ハ樹大なり
五月花て 実し時 民家にもある也 和物なり
食之性 [illegible] 似たり 小 [illegible]
し [illegible] 植後 [illegible] 村 [illegible] 蔓葉
又 苗 [illegible] 一種 [illegible]
として 一種を 茎の [illegible]
実 [illegible] 用 [illegible]
牡丹 十月
草麻子(ヒマシ) 葉 [illegible] 民用 [illegible]
五 [illegible] 食

栝樓(クヮスラウ)根ハ根も葉も用ゆ若きは附陰漢ともに
瓜のよしき夜ハ栝樓にかけり根をわりて汁
水にひたして天花粉とも製して食するハ瓜とゆく又
こゝりとつゝ首を陰やしむつきハ又別に記するなり
枸杞根ハ地骨皮と云葉ハ枸杞かしらを味よし性勝れたり
実ハ苦葉ハ甘也葉を干して食也又甘茶とも
五加皮根のはと葉ともに葉茶にして食
又葉ハ茶にして呼ますのみ又らとも五加は
漢中用ゆよし
防己つゝらふじつゝらとて縄のごとく用ゆ
民間とゆく中に多し

冬葵(アフヒ)小葵とりて子をとりて葉も用ゆ根もよろし
らふとう又蜀葵も花葉ともに用ゆしとも葉に
用ゆ
艾葉ふつと田舎にあるし葉をもみて用ゆ毒なし
こよりにも伊吹山の艾よし但し其大きなれ艾ハ用ゆべし
石もとをれとも干葉をちんなり三月より取よし
六月より取よし石干し
當歸　川芎　甘草　木瓜　萆薢　麥門冬　天門冬　山
梔子　柴胡　葛根　荊芥　細辛　香附子　香薷
白芷　白朮　車前子　地骨皮　麥門冬　甘草
冬葵　香蒲　梔子　茴香　白芥子　高良薑

金銀花 白芨 蘭鋪 紫菀 金佛草
桑白皮 木賊 決明子 海螵蛸 益母草
澤蘭 山梔子 茱萸 牛膝 杜仲 楝子
蜂蜜のたぐひ其外の薬種唐国より来る類多し

菓蓏類

棗 長きと丸きと二種あり大なるを上とす葉出る甲
發する時分苗を植て又は種子を蒔て後三年
にして肥たる田地に植能うゆれば性よし一説
𦨞棗木は西国より出る実大きにして茶菓とす又
此はおとに似たり木至て堅きをとりてつかふ細工
又もとし紙染物等の器其外色々の物に用る也

又より人をゑきする事多し
柿 是を上とす数多し柿木は実大なるを上とす三角
なるは実もなし柿木の実を種として接木にする
事也接木にて柿木の如くなる実を取る一品
にして柿木の實にして数多し
柿は又くし柿とし皮をむき干柿にして甘し
種を上とす柿の実は柿の上に甘しと申す
やうに大和柿とも御所柿とも申す大和の御所の辺より出る
也しくして多く出来て久しく能く売れる
名を柿とも大和柿とも云秋月の
中よりは柿は多く作り其の名を

久こ稲りハ米の実上古に年し本朝にし稲下にま
多し田相にてよそ本こ早しと本稲りといふ人
こよる飛ま常ますり又稗月よ小谷稗とて是
稗すり豆こ干まして味ヲ大なり
大豆又下こしまた赤キまわし黄豆早し加食
稗粟又もの家早いふ小粟本り山北は
多しもの大民早と石飯よめつて食とたまりま
粉にて山と陸田豆とまたてまつきて挽て食へ
生し大麦長し秋実のわを母年かまつてまし
食麹子山中下こしまた四月よ実熟甚
お麦つてるくろく実一酒飯也とすて国

もハかりむとをとちこしふ小ま実まち早し
唯よし蕎麦んとをちこしふ小粟大なり
蕎麦四角あり甘蔓豆の実の名
唯よらしかくもふ小ゆへこめて食とも
尾莓実な実大なり味尽し実の名大葉
国東よこし山中小を冬し実大部より白色
来のなも干し国中下こしまた若菜秋植冬
村の枝村邑椿も油こしふ下まりて一樹大木
なり豆の麦の下国よ大人ますあて四方よし枝
跡なり豆ヲ実の大木ろ今を枝のまし紅白二
種かり豆も豆具大なり

古利子樹冬月花開け三月より実熟果を食
すし一口実のさきわけみなり餌ニ手をとらへ给ひ実
しそふらしふくくみさらふ
湯に先は実そ利子のよし実大し花よし楹柱
まえんのの山中を隠し栢木との山中に多し良きと
名古二種あり性悪し
楊桃花は[redacted]当小実にて東より千し貝ける熟して白
実の黒ちけし枇杷よりも小さく熟して味甘し白
楊桃名橘と云
山梨秋より熟大きさはかつらに又実相応に似たり色
林檎橘かなり和甘くしてかたり
し

山椒木は山中より若枝と割て食料に他皮と
こけりは木の熟して山椒の又冬山椒の実を実の実で
冬枝に実より多し山椒より甘し和山椒の食料
茱萸二種あり南代くはくさくくらいくくふ
蜜橘柑金橘柚包橘花柏仏手柑
田中木に多し北中金橘と極上熟村
上房正と名と近江と佐川金橘といふ日向
丹東村より多し木丈異当和実林村より大
本の橘樹名吾樹枝さらの内山東西七南
山ハの実人の文日多し常山に代実

孫仁和三年二月廿九日の条下ニ曰天皇御手より
小柑子と別貢を十一月二日より以前これを貢進の料を
来る是故後やこれをは本を今是とと云ふ有
於三十日甲子小柑と称しや元密柑の和名を
太らされとは花也されと密柑の花に於る今
密柑と云ふもしたち花は是いはゆる柚柑の類是也
三河を始め〳〵されは紀伊の其外諸国より出陰た
往昔上代不作なるの比は国にも乏し但柑せは
日国の中にも上方衆の字より外知らぬ山中密
よりそし植しまた其後にハ枯る柚を字にた
其しき代の是もりまで称中し文表密柑有甲よ

し其子本のりしつ其年多し是密柑有枝ま
二種有たちはなやふたちはなはいはゆる
一度三しり此の其の葉有たいなし

菜草類

一胡荽俗ニ上帰ふつとりふけ此の也民は文と云
とりふ其花細く其子其の実とまて但まつきまで
食也しも又よりより其を三月三日の節も是と
用ひし也和漢の草書まて性まし
薊 小薊 和名ありき人食を嫌よし思はるこ有て
此他其の食也十一也
其神草ま和漢諸を草木に其本の香有門冬ま

佃なり
蘩蔞（はこべ）ハ甘く毒なし食を助すし性寒すし甘く毒なし
いたましきを止れハ悪血を止すへ腫は煎し
なとる、悪瘡ともよく癒え小児食を食をへくへ
かふたものよ
薺菜ハこの地にはよし苦く温にして毒なし
ぶぶりとれなハ薺の花葉を
性甘ふ葉と共に佃なり花を用ゆ食にて葉の
よし早く花を取まて水にてはこまかの用ゆ
花根なりて虫中に入れ膿甘く冷に
有毒し

萵苣（ちさ）ハ深く甘き食を少し苦く長く
甘しよわの物る腸に言食を止しよし
性よりのふ冷なり
まて苦く秋まへ冬まへしてよし赤麹を用ゆ
黄色の苦まて苦には佃たり滋てりと用てよまき
物し諸土下し
胡葵腹を安くして人の[illegible]の肉のもなれハ心を安し
[illegible]
とらし
[illegible]
なし[illegible]

物と二様有字條きて秋の体をきて十七しやとに
似たるも其花の名前不定を存すると云へ花のなり
百も未不定而云ハ其草の異名異名多し其言なるをなすの
なれ之

虎杖秋大也と杖にも見る此小見合也
洞剛異名にて寄添に似し其言上気て事異大奈
秋冬と春にも実存する家し且陰に極て山称也
ありり

なろくぬきても存し其もし隠しし秋を当
るを悪應と物を代其ると如く用事ある以事あり
生存るハもし且て居とあふかなるにも後も渓

秋に同し
落葉(ワレムラサキ)其字其き意し今と実は悪し世間を用し
冬に云く
居と深山の中にある風尾且に似なり晩事の出
是也上者の且にて春以小隔也
白(ウスバ)葉(ワウ)品蘇月雁物と浅也且荒英なり
和風異にも上者其に似なり付事の世主なり
あれハ且其年寒風吹上者れハ者吹中に
あれハ其吹其吹の中にあれハ秋吹且ある者
是ハ冬な風吹一市となれハ二季吹且其平の
事中なりと且布乃候なり文称也

苦菜の葉ハ大ニ長し是れ生する所ニて異なり苦菜之葉はし
りて一種苦菜是を白苦菜と云苦菜ニ似たり長ニて大
用ゆるは苦菜性ニして是を菜ニ食ふ也山中ニ多く
有とゆへり

黄苦菜ハ根ハ紫色ニして山野路傍ニ多し山中ニ有ハ
有り

薊菜(リウタツ)ハ形ハよく多くの葉を生し根ハ苦ニ
是れ似たる是れ大ニ白く
草苔ハ形ハ山中ニ多し 此草ハ秋月ニ
生する故是ニして味ハ文ニ有て苦味有り食を
隠たり

蕺(シヤク)菜(ツクバウ)ハ形ハよく葉を以かしのよく葉を
以て其のとし是を紅白ニ而うす
路旁(ミチ)草ハ形ハ葉大ニして茎ニ而是を是よく甘し
又ハ湯ニ而白りニ是を以て是を用ゆと流を用ゆむ
事ニ云ふ
葉ハ根を以て黄ニして僅ニ是を似とゆく黄緑の
ことしと実ハ是ニ似し白くなりき根ハ果ニ是を菜ニと
用ゆる是ハ根ハ根ニて根を是ハかの物生ニし
蕺(ドクダミ)菜ハ又ハ其葉とゆふ路中ニ多のよし是ハ黄菜
葉ハ根ニ入たり路傍ニ早く山中の甘き民を根ハ是
根のよふして是ニて早く是ニ食ふを味有し

羊蹄根（ミノ子）腫を含し瘡疥を治し一種薬なるき
名割は又破積にも揃て使民を用し毒とし
なまちを作り
蘡薁（エヒ）国俗からミといふ和名いぬゑひ蒲萄に似たり
又実を煮て汁を作り性よし生実を干して
茎しいれあさ同じろなふとすもとすいふつる
蒲萄よ多し茎を煮て痒をよし隠ことを衣蒲萸
なり菜とことし巻柏
巻柏（くはひ）而こと山中にあり
栝樓（とうかうこん）とらとかやともいふけのかつらともいふ萬葉
なり

若荷（つんす）根の名実の名の様のよし形をも荷の如し
荔枝も似たり小児合ゑと
茎も実の中よ方の又実を煮て合にも又花を
して保ことに似とゆく性をよそした
枇杷山中よまきと葛とそのよし枇杷とこと差の
葉とよふ名書てもなる人かは
周菜山中よ梅よあり
若 蘿蔔菜 芭蕉 雞腸草 羅藤
苘麻（ミツバ）尾草 破将水草 石長生（いわつ） 虎耳草
葛（キミ）麻 春草あり 曼陀羅花 木鯨草 毛せんたけあり
榴頭草 橘草 翳児草（ヤハラカリミ） 日外鯨草園中

まるし実さし邪し弱し又ハ食への肥やまるし
（又初のうちに備ふ）

諸竹類

竹大竹とも名付まるは上古より都山中に在る是は
呉竹とも山竹とも又女竹とも海の如くにやまるし筍
せられし白竹黒竹斑竹寒山竹又大名竹苦竹
多りある黒竹さ竹ハ極ニ下し自竹ハ竹の実
まり也年ある黒竹実国より来の是黒竹なり
（きりの）筍は大食よるし絶は向竹の筍味付まるなり
是竹の筍よりまし丸自や大食よりまるし
只今ハまもし大食又自まし飯食してもまし
味者の筍にも実て他の物やまし（是に一味やまさる
なし）と友まの筍にかけり又胡麻も薑竹のまま
是とけも竹救ニ胡麻油にて煮き八日年か向せ
とたつこ庭の筍まる（なり）

群花類

牡丹は福田博多に移して其代より今やまた別に勝
まし好まれし牡丹種類ええの国より
白牡丹上品やまして京江戸より年ニ一日種を
又は牡丹上品して上品なり赤ハ諸まの家に福田
博多筆への屋敷師の国まま後の庭よりより
里の牡丹の実植まる参る蒔て後別に是を

然中紫花なるハ蓮の而も第一白となり白と黒とふとも
白とよつ〇り紅白の外雑色甚多し紅白よ
常より紅白の上品の名ハ〇〇ハ〇〇の〇〇
白〇〇紅と称す
芍薬も又佳品多し諸国ニ〇より又芍薬ハ
〇別〇〇と云ふ是第一白ことし今の〇〇〇
芍薬〇より
菊も又佳品多し品々上京ニ〇〇〇〇〇〇〇
より品数あり伝ふるを〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇より〇て〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇十〇〇〇〇〇〇〇〇〇諸国ニ〇〇
栄〇〇の〇〇〇〇〇〇〇〇陽〇〇〇と
〇し〇〇〇〇〇小木より冬の末より〇〇
らく〇よつらさる枝の〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇し
躑躅ハ不和なくてしく〇山中ニ多し志〇紅白より
又〇〇紅〇〇〇〇〇〇てしこやしいて又秋冬の〇〇
〇〇石竹〇〇又紅〇石竹〇洛陽〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇石竹の〇〇〇〇久しく〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇又白〇〇
〇〇〇〇〇より〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

那之仙なり 俗金盞山吹といふ 有り花大きにしてよし
本草にし 又黄山吹あり花もよし
水仙の類多かり 下品の花は金盞銀臺とて見事なし
ことし
紫菊花二種有 毎年一種を移し植るよしといふ
此花茂て一種まここ 咲花 これなり
白菊は此中にて咲く 東籬にての白菊花とい
漢名を ... 四月に小花を開き 二種有一種を
何首烏 白菊花といふ
桔梗 花に山野に多し 葉花色二種まして
陰地 ... 四月 ...

扶桑花は 又仏桑花 なり
茉莉花 ... 赤花 又 ...
用に利あり 又玉簪花 萩有り 東国に植て花
... 又白萩 二種 ... 萩有 ...
黄白 ... 又 萩 種有 園中に植 秋月の山萩
秋の ... 村の山に 種とるべし
茶蘼 花 ...
石竹 ... 開く ...
杜若 ... 花 ...
有り ... 花十月の ...
... 有一百 ...

百日紅茉梅花盛ひさしく花色白こそあまたあり
咲残く二三花もくへしかもした蕃茨の外同し赤き
夏合不乱多し花のあとより雨多し萼よ白花
由まと用ゆ又黒百合とて花丹とみ出て合えし
味よし花を味甚し　山丹かり
玫瑰花四色あるもあしく香甚よし冬紅に
又白花あり気ありにてくまなきとも赤き香あり
旋乃実なり四月にてさえ花桶とこへ
秋牡丹花ハ牡丹と似し花色は菊のことくの加なりと
きくるゝ実用より赤いつそのも花ともとて一夜菊こそ
ふる山花の事より山際隆はつ出まさしかくゆかし

上旬より咲き九月にまでもおよびて咲く
秋海棠白花有て日本になし唐土中にて花
よりまつ和名なし注に咲て四ツ日に見よ実と
廿日まで四月より花咲く
蝋梅小花にて実ふきて梅にてきまき三四尺よりきまと
一重花よりあつまり廿日と三月より実は花の色品は花也
早くこちまで出来るとし黄大坂にて出梅と云
花の形人まねふり色手の乙まより海棠根より
小松あきへ出こりまやせ
仏桑花は牡丹のしくあさしまふなよりいそう
乃影に四月に咲て名乃泥

鬼桜は木ニ山桜桃の如葉ニ実なし花白く
しべ重単十ニ淡紅なるありやよし
山茶花申し又淡く深く薄紅ともまじはし
十月より咲て二月まで花のあるべし
花形色を大椿に似たり山中ニ多く実ハ里ニ
植るさし枝る

薔薇類多し 金作して紅なる有色と牡丹花
咲く草生て白き有又月季花かりり毎月
花さく
杉樹花葉よ芭蕉に似て花白色にて四月
より咲て十月より秋かりり色又花久し

実て蓮角のごとし 其人甚下山花之其人甚ハ
日花ニなし 檜やかれてよく久し
木より花さしのころ小樹二三尺より葉をかくとに
山樹合金絲桃 花ハ先キニ咲のごとく花も大くして桃ニ似たり花黄
扶桑花 木仙ごとく花まろかりて 木槿 花紅白多し青葉花かりりてよく九月より十月まで花さく
扶桑ハ花 木槿のごとく 花木ならんよし 小朵て花し朝に開き

海棠類
垂絲海棠 西府十二月に咲て海棠ニ各別なる麻角
葉よ似て長くやかき実かりり其又露草も其
うるはしき海棠ハ 金葉ニ似て葉 して優ならず
金生一種も木 其名実ニ性を悪かる色たりまで

らところ二月[illegible]
[illegible]のりと[illegible]今[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
採て用ゆ
[illegible]
[illegible]
とり
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

丹原村の松井川天王新井川白川寺良郷板野川
多し海藻に似たり其色黒く緑なるもあり絲なる
ごとく形ち細く長し美なり是を暖なりし但出来
ざるもあり春多く有やしれず其人食ふ事堅其用
以後を出すとうて毎月に藻中に四時流れて
川ならてハ産せざる故海藻に似たれと一種十
藻の類なれバここに記す
石蓴(ウミヂシャ)紀州和歌浦の海名で申へあるもの
其外諸國有之類物なり
海苔　海松(ミル)　鶏冠菜(トサカノリ)　麻尾菜(ヒジキ)　心太草(ココロブト)
海髪(イギス)　於期苔(オゴ)

紫菜　神仙菜(ヨヤウノモモ)　日外海藻多し
善く乾し紙に作り民海苔とす
食ふ事料菓よりも多し
樹木類
葯?庶國中新に在山を峯とかと一りし
諸國傍より出てて稀にしらうハ其品新ら
多やうの地田淵所山内北山里木堅新板場
松竹新岩元の杉村君居新色赤栗や杖尾之
名木若杉深ふ椎真新の木山内にれ迄を
様れしむし作りまかし江河より掛体多く
出つ

材木　材木の多く出る所ハ第一土佐を佐伯
山と国中是に次ハ薩摩大隅山ゟ日向細山
飛騨胡田山木曽ハ信濃桂川山伊豆ゟ高知山
甲斐駿河遠江平山所々に山中其外多く出て材木
多し
松魚　国中の出所多く松魚に産は其中に
松魚を称して元八節と云薩摩土佐の松魚紀州
松魚も土佐の松魚土佐の松魚ハ紀州松魚なり
松魚土佐節ハ上品の松魚より伊勢節上之
松魚ハ紀州土佐に松魚伊豆其外にて多く
且又出る所長崎等所々の松魚にて流し

東ハ松前より昆布多く出其松魚多く是有りて
是を津軽より又丹後松前にて常に種を
もふ東国の昆布松前松魚を松前の
廣しと又所々松魚を国の事也
松前ハ松の多き所故是ハ多し松前にて
其松魚と其の利用多し又産ニ成る事て
雑穀と申く是信の松前に持ち長く用て
我浅く事も松前の産にて使用に江戸へ
下りの船路とこして國々の事に用ひる
又是より西国に流し是を其かす
茶　是ハ国中出所多く茶の実を植るなり

栄西禅師宋より帰朝の時茶の実を持来
山城栂尾明恵上人に是を贈る明恵是を栂の
尾の深山の園に植させ末明恵伝記に見え
たり又同所より茶を用ひ茶園始
まる其後此茶の実を宇治に植初たれは
今も宇治園田明恵よくなりと年中行事考
へたり此茶の宇治に植はじめしより
初也是よりて茶畑なと茶園作る中
に栂尾にある茶をやう種植たり小ら
事書伝らし今宇治の茶種山下に
宇治郡山つくる明山茶園多し

樹乃江川上に栽て年々中止し
檜国中所々にあり宜しく植付べし
用也し民用に利あり
杉宜しく栽べし実植なしに杉檜相並
梧桐の類なる材をも多く民用に利ある瓦漆等
の汁ハ甚植樹に有り園にも山にも植べし材木
国中所々の林にあり宜しく寒地乾燥
其の山中に生ずる杉立大木多き図
よく帝に多く生ず実大国に出
室しかつて商売の杉と他の欅
材よし但其木出しまさけ椹

隠さまつる隠士又是梅山と云し
臘梅 花の形ち香低く是乃宗あり古奇よ
くり是於梅の品にかの形まこうちなとなり
紅梅 白梅 白梅一重と八重とあり花も多く蕊よ
緑萼梅有 紫梅 椿梅とかハ是花八実多くよ
ろくし又豊後梅とて用ゆるも又かも又消梅
有是花まてもより又よ冬至梅等大盃梅等
是等梅は白梅種是は木太くる事並より
かたし是花出り又鉄木梅とて
魚子書中に楽出より緑萼梅梅添り國にある
と梅乃立所なり。

桃 紅桃白桃金花桃金絲桃八重桃桃瑞桃
なと数多し油桃といふ大の方是を実椿に似
たり一代桃あり実を種にて早木は早く花咲
咲らしく冬桃有て十月に熟せし
梨 花乃類
木芙蓉 紅白ある重あり秋花咲より堅ず
似たりこれ木芙蓉也又家とぶ
黄蜀葵 秋月ほど山よ多し黄色
乃様にて又枳殻ありし又椿
事木有ひとかかりと材用となる
山茶 紅白黒にて重あり八重有是京にて多し

椎　長浜山中ニ有東山中ニ多シ　有所ニ多シ
山中ありといへ臣ときとつきすりを別ちては渋
否ル極破ニ且ニ有種類有　又其の実ハ小なり
実なし
榛　上荘郡山中ニ有　又献有一類二種有
楠　国中所々ニ有本多し　立所杉国ニ有
本多しきニ郡中中之村寺の杜の例ニ有
楠　国中処々ニ有本ニ又枝有五六尺余ニ有
而ニ又余有もとの木と共ニ日本国にありとも
楠郡にありていまた大木ニ又ある所
所々大木とも大楠有九二種有此ニ有ありし
ふるき種の本ハ似たり山中ニ有実ふし
池の日ノ得其外は時節とる用中
柳　杉柳の柳　並やしれ柳ハ多く長し
ニしてましもし多く植て葉ニ在ハ文献
秋有草の葉ニなり又是ハ化す秋
ことに
鳳尾蕉　国中ニ有二種有葉有緑にて
一種より杉ニ有大中ニ植て陰葉ニ有
丸蓮ニは国ニ有里ニ在寺ニ有ニ多し
高杉ニ植てより是種也植やまし
蒔草　所ニ山中ニ多し　藤香ニ在ル然中

三良都ニ西山乃農人ありしかその実ニ三すつたへりと云
実に毒ありと覚て戒之て春食しむ
胡椒木 浄ニ似し異きし紅粉也 女子之乃
木有如くなして似たり 其実紅粉也
椋子木 丑呉実 株初甚也 唯其毒なし 小児
如之今は 其果用て実をとく 山木賊
紫銀花錦白 十一月より八月に花咲
又木之根より 生して木をなし あつまりて
似た棠 梅花より 吉見(?)三て花開く
海紅棠有 山木ニ八重の花咲 種より子し
垂糸海棠 似た棠ニ一彩 似た棠乃

春よりつけハ甚長し 其ニ海棠の花よりも
来りの名なり
海棠ニ海棠 此其実林檎ニ似て 是を食す
花なし 又海棠ニハ 春より後より木也
新羅の二種有 山海棠 果を花 花蕾三ッ木
邦にも有りかれ小山ニ有
樺木瓜の花乃葉ニ似たり 後ニ果を生し
木瓜の木實を用て 木瓜ニ云二種有 種乃数
生ニ 地より 硫 褐色
衛矛ニ二種有 毒をもすたらし 枝を削る
果実云 用ニ 秋冬ニ 実を 用

もしけ又紅白黒色二種挿木にて相なりしてよし
実なりかたし
石南花山中にあり松中伊賀阿波南部
村の上乃山にあり暖地にても冬には枯葉
樒山中にあり枝多く葉よく見えたち
わ西こし食する味をよし毒なし
楮木所々にあり葉は紙になる畑にして多く
伝来の苗種実を蒔之角々黒とあり
山茶科蘭は畑に植て和名をつばきといふ
又合歓木ここに山中にあり木なり又実をとれ
竹生すしなき六芝で食する味なし枝を知る

一種くろくして種有机催を知らば食法
はとく別なり
罌子栗柳の本は似なり葉は実をとれし蒸し
花油を用ゆ大々其々のどく
種て利とも実にあまあり
白楊鮮を吉川山にあり黒枝をほし葉を
桐の葉も似しわしあり花を桐の似なり香る
三角の葉相にあり柳にて久しく葉
木犀庭下の春にあり冬に花あり秋花さく
まよくかほりよき又種の多しと花をよくする
より

歴木(クヌギ)ハ山ニ有雑木也一年ニ実なる
茅栗(ワクリ)ハ川山ニ有栗ニ似テ小し実なる
榛子似たり
辛夷(コブシ)ハ三月ニ白花ひらく赤き実有大木なり
桜ハ春さく花ニ四五人有るべき人まちかね冬より花の蕾
しるし有又桜なり山ニ有ル色よくうつくしく桂にあり
しかれハ実ならさる
南天燭ハ常ニ葉しげりて冬も実ならさる
冬ニ実ならさる白き実なる路ニ有ル草
女竹(メタケ)ハ実なる
冬ニハ二種有一種ハ三月ニ得たり一種ハ冬
まことにふしぎ成る紅の実なりて実なる
ころやし
梅ハ春さき花ひらきてすこし実有て実
たしかなる冬ニ花ひらき実の大きさ
さてそれ作り用て木ニも才の後のこと
おそく花の葉は冬ニ木なり
皇太子の花の昔ニ不帰し実ハ
なほ用の花ハ木ニなり
橘ハ青き実なれし、まことに橘の万福をし
申より橘ハ今の国に来し来たる
漢の時ニ似たりかくて万福もの伝へ奴

稲の茎にも生ずる事もあり　初茸の内よ
り臺本に載る松より出る物は皇居山に生
ずる事も極て稀にして又村にも在るは少し
松茸は是を用る事
菅根は是を云様に出るより是を塗りて佳
なりとも謂ふ　つまりは山茶の花なり

茸類

岩茸　山の岩に生ず　宮川山奥沢彩古木山又高き
石に生じて是は名として是を干し晴る時は
又神山
松茸　白砂の地にも松の根の辺に生ずるなり
松茸は東西二種あり　東より京へ出すは
まことに良きものなり
久しく保つ事を得ずして是を陰に
保ちて乾しく保ちたる松茸又は是
を松の松林に生ず
是に茸の松木の松茸の種を
出す寺国より京の又かくし出国にも松林多
くあれ　代国より出る事を又二かる秋へ
茸もしかしの松林の内に生ず茸は山より松
が多く有る是を出る事よくなる
金茸　八九月山中に生ず　是を松茸に似て生ず

あり又こ云ふしこゆすとし本草會に云ふ
杉菜の名而出雲土佐紀伊和泉なり據
なり毒なし
稲草是又八九月出花を生さし是草
沢瀉よりさし兩まいも會にこれ以外 又
しこし味は毒なし
香薷草而ニ味牛林中の本よつかさしせ根
草の外薑草東方上沢ニ生なるよし
柳草柳に似たり
汁草又川縁に生し其形大汁のごとく長
ミナ又あり稲又あり味は蘭草に似たり

千里草山中の谷より生る
家草而ニ山中に生ず口風のごとし
風草而ニ山陰にも生ず其葉二風のごとくの
よし其形大きく汁に似たり又白色黄色あり
毒なし
馬児草形似秋生東山谷陰秋林中山根
秋よりて生ず方々に出る一種に似たり毒なし
久年ゑく云々毒あり不可食
木草而ニ山中の木に依り生ず
杉草性土秋生ず高山平原秋暮風にて山根に
秋食木山大分山那須山生ず奥山秋山にも

郡大隈山東次郎秋月出雲堤ら山下下社
高形小堤村杉本村上野東郡三野村十文字五郎
の山中に産せり土人松より生する物隠口と云り
松露草松露今草下陰松より生ず草の
上宗なるべし
土宗 松露のしるしおいや大黄に似たり
二月四月の頃生す黄色食ふ味あまのよし
事多くは外の藻なりいましえは又其性害有
あとせし性もち食ふべし此
雲英又ある宗示古宗に三文多し国中
小山土に食に品あるて有られ又杉本に膚乃瞭今に
その物は土に雲芝に似たり
いくら農芸よし刺なし性民中にて産す
ましく食ふ味や性や悪しき者入食ひ
麻の玉大斤よ国なり主月山中に杉木中に
肉よ細係多し形堤く中し味よあらはとら宗
土民食ふ事あとく多く吻ふ

筑前国土産志巻之上下　三格　大尾